The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	加藤洋介先生と『伊勢物語校異集成』
Author(s)	藤原, 美佳
Citation	語文. 2020, 115, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88504
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

加藤洋介先生と『伊勢物語校異集成』

藤原美佳

加藤洋介先生が大阪大学に着任された二〇〇六年は、伊井春樹先生がご退官されてから二年後、後藤昭雄先生がご退休された直後であった。私を含め伊井先生を指導教官としていた学生は、伊井先生ご退官後は後藤先生或いは荒木浩先生の指導学生となり、新たな先生の着任を待つか、そのまま荒木先生の指導学生となるかのいずれかだった。私は前者を選び、博士後期課程三年の時に新しく着任された加藤先生の指導学生となった。

私と同じく指導教員を加藤先生にした学生が当初何人いたのか定かに覚えていないが、毎週の論文演習に出席していたのは私を含めて四人であった。この頃の私は、伊勢物語の勉強を続けたく博士後期課程まで進学したものの、伊勢物語という短い作品を狭い視野でしか捉えることができず、当然のことながらその研究は行き詰まりを迎え、業績が無いため「伊井研の不良債権」と揶揄されていた。ご自身で指導学生を選べない加藤先生におかれては、最初の指導学生の一人がこのような有様で大変残念なことであったと思う。

『語文』八十六輯の「平成十八年度講義題目」を確認して思い出したのだが、この年の大学院演習は、当初は源氏物語奥入が予定されていた。第一回目の大学院演習で、加藤先生はご自身の経歴、研究、現在の関心の所在についてのお話をされた。『源氏物語大成』の見直し作業をされていた先生は、河内本、別本についての調査を終え、今後は定家本源氏物語についても同様の作業が必要であると考えておられた。しかし源氏物語全体を見ようと思うと確認作業だけ厖大な時間と労力を要してしまうが、一冊で完結する伊勢物語ならば良いサンプルになり得るのではないか、とのことで、藤原定家を軸に源氏物語と伊勢物語の双方を横断的に研究しようとされていた。加藤先生はそのことを話された上で「学生さんの事情が分からないので大学院演習はひとまず源氏物語奥入としたけれども、要望があれば他のものに変えても良いよ、伊勢物語でもいいよ、皆が良ければね」と私の顔をチラチラ見ながら

仰って下さった。加藤先生が伊勢物語諸本を見直していらっしゃることは、指導学生になりますとご挨拶した折に伺っていたので、広大な伝本研究の世界に踏み込めずにいた私は、この好機を逃してはならない、と図々しくも「是非伊勢物語でお願いします」と申し出た。幸い他の履修生からの承諾も得られ、この年の大学院演習は「源氏物語奥入」から「伊勢物語写本を読む」に変更となった。

大学院演習の内容は、一人一写本担当し、その写本について説明するというものであった。加藤先生は、池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究　校本篇』（大岡山書店、一九三三年）、大津有一『伊勢物語に就きての研究　補遺・索引・図録篇』（有精堂、一九六一年）、山田清市『伊勢物語校本と研究』（桜楓社、一九七七年）の三校本を統合され、さらに三校本に収められる諸本の再調査を行い、修正を加えた研究データを持っておられた。これは後に出版される『伊勢物語校異集成』（和泉書院、二〇一六年）の土台となるもので、二〇〇六年七月の段階で、三校本所収伝本九十六本（うち重複八本）のうち、三十四本（うち重複五本）の調査を済ませておられた。そして、写本の傾向を把握しやすいだろうから、と調査を終えるごとに更新される先生ご自身のデータを惜しむことなく見せて下さった。三校本を一覧できる統合データは大変有益で、そのデータのおかげで、対象写本の異同がどの写本群と一致するのかを容易に確認することができた。

演習発表で求められたのは、写本にみられる異同の性質を見極め、写本の位置付けを行うことであった。私は校異データが示す異同状況を写本に戻って見比べるという、ごくオーソドックスな方法に思い至ることができず、写本に見られる個々の異同を、誤写なのか、親本の姿をとどめているものなのか、他本との接触からの混入なのか、どのレベルのものなのかを区別することもできない有様であった。

大学院演習でも求めるレベルに達していない私の状況を憂慮されてか、二〇〇六年九月十日、加藤先生ご自身も初めて訪れる鉄心斎文庫の調査に私も同行させて下さり、直々に文庫訪問の作法、写本の調査方法、撮影の仕方をお教え下さった。帰りの新幹線では「あなたは愚鈍であるけれども、研究者にとって愚鈍であることは決して悪いことではない」と励ましの言葉もかけて下さった。ここまで丁寧なご指導を受けておきながら、翌年になっても私の研究は相変わらず行き詰まっており、加藤先生もそんな私に業を煮やされ、二〇〇七年十一月の古代中世文学研究会で冴えない発表を終えた私に、「今年度中に芽が出なかったら今後の研究者人生は無いものと思え」と叱咤された。私を突き動かす原動力は、こうなりたいというポジティブなものよりも、こうはなりたくないというネガティブなものの方が大きいようで、古代中世文学研究会で受けたご指導に基づき、もう一度大急ぎで発表内容を見直した私は、その内容を年明けの論文演習で発表した。発表を終えて顔をあげた私に、加藤先生はニヤッとして、「で？　どうする？　どこで発表する？」と仰った。「やはり中古の大会で発表するのが

いいかねぇ」という先生のお言葉で、その春の中古文学会の大会に申し込むことになり、私は研究者人生を首の皮一枚のところでつなぐことができた。二〇一一年に学位を取得できたのも偏に加藤先生によるご指導のお陰である。

加藤先生は「学位を取ってもすぐに就職できるわけでもないでしょう」と、二〇一一年四月から私と丹下暖子さんを特任研究員として雇って下さり、これまで先生が蓄積された伊勢物語の校異データの公開に向けてのお手伝いをさせて下さった。私たちの業績になるようにとのご配慮から、校異データは書籍での出版を考えて下さり、また書籍にするなら真名本のデータも加えよう、と私たち二人に真名本の校異データを作成するよう指示され、校異データの作成方法および公開の手順を直々に教えて下さった。

しかし肝心の私自身の研究は、狭い視野で物事を切り取ろうとする悪い癖のため再び閉塞状態に陥っていた。研究者として自立できない自分が情けなく、加藤先生にも一方的に気まずさを感じるようになってしまった私は、妊娠を機に特任研究員の職を辞し、以後加藤先生にお会いする機会はめっきり減ってしまった。

加藤先生に最後にお目にかかったのは二〇一八年の総会であった。この年の三月で阪大を去られることを事前に知った私は、在籍中の非礼さを詫びたく、加藤先生に総会が始まる前でお時間を作っていただいた。簡単に挨拶を済ませて早々に在籍中の非礼を詫びた私に、先生は一言「あなたはまだマシなほう」と仰った。小一時間ほど談話をした後、「春からは関西大学に移るけれども、論文が書けたらいつでも見るよ」と温かいお言葉をかけて下さった。そう言えば『伊勢物語校異集成』の執筆者紹介で、肩書きの無い私を「現在、育児休業中」と紹介して下さったのは加藤先生であった。成果を出せずにいる不肖の弟子に対して、在籍中と変わらずいつでも手を差し伸べて下さる先生の優しさに、有り難さと申し訳なさを感じた。先生は続けて「勤務校が変わったからと言って、阪大で得た縁を切るつもりはないよ」と仰った。人とのつながりを大切にされている加藤先生らしい一言であり、それが先生からの最後の言葉となった。

加藤先生を偲び、「建仁二年定家本伊勢物語の復原」（『中古文学』七十九号、二〇〇七年六月）、「定家本伊勢物語の展開―その変わらざる表記をめぐって―」（『語文』八十八輯、二〇〇七年六月）、「室町期写本の一様相―伝肖柏筆本・伝心敬筆本・坊所鍋島家本の三伝本をめぐって―」（山本登朗編『伊勢物語　享受の展開』竹林舎、二〇一〇年）を今一度読み返してみた。特徴的な表記への気付き、漢字の当て方や音便、表記の変わらない部分への注目など、多くの写本を調査してきた加藤先生ならではの着想が懐かしく感じられた。と同時に、私自身の研究課題を思い出すこともできた。この機会に着手すべきなのかもしれない。

受けたご学恩に報いることができないままであったことが悔やまれるが、今はただ加藤先生のご冥福をお祈りするばかりである。

（ふじはら・みか　本学博士後期課程修了）